へ13
2947
45冊

へ13
2947
45

昌平坂学問所

目録

すどうの雑
女訓おりの見せう
床と座敷との変
野ひ切の変
にくめのゆ
客女訓相見ぐさのゆ
後朝の露おりの見せう
秋舎のてくる粉ふ
りるあとびのゆ
女訓虚実を制ゆ
いろのゆ
女訓対のうくのゆ

帝国図書館蔵

ある[illegible]の妻

或人問曰如帰賞弐十金信よりてぐ
ぐうしんあまりうんぬきくありてん
内儀のお徒仁のうのりめ合結うけ
ぬくごとんさんアろうんをたうう
ばうアでおぐさみいかーもうれを
かーじーみうらねうらがあてびの花
なうんう善旨如帰賞弐十金うろね

まてハたのとびのうとゝ
あをかゞ〜をそいひ〜あげさるへ
さん法ゝけひゞづ〜くら〜むらをび
かりなんとう口あをすゝとゝ
ゆあ〜ん又向女命ハぜんえふぐ
さゝふうふ相あれべあり〜ろく鼻
あゝとあとびあれこんさん法と
けんゞゝひゞたのとびとん蒼日され

たゝよ毛の花をとるのあり〜ち宮と
るゝのあゝあ命の虚空もかまうゞ
秋毛むとうでゝあゝびよ彩遊をいくら
もあゞげ義五者をようび夢現をうき
どゝ〜さゝゝひゞぞゝとうる毛
たのゝこれ花ゝうこゆゝふ花ゆう
あゝゞゝもそゝ毛もゞゝる花をび
さゞひようゞざるんあゝくゝりんゞと

徒こけ[ちんど]なるあいとりのかたの
ことにくらうきる実[じつぜ]をこの
むしあそびの実あり[この]ぶんにハ宮
のんよりつづきるあれども実を
さのむハ宮のんだうでゆうあす
なれをありがさし義をさのむハ
どこぐもあるるあれを仕ゆそし
同[おなじく]あらハ命[あら]やうらよりあ

じこのあうてさうぐハ家内もんや
もくひくハはゆりうりべあ
きなきをあそびの義をつるゆ[ひ]あ
らびや又同康をこのむハゆばらく
産業[さしき]の内かつそびあり云人あ
いうぐ 答曰 是も拙あじ乃是之産業ハ
拙ひの義康ハあそびの実あり
づもあそびあらうさうハあ 又同考

らべを実をとりんらを花をとり
んら蒼日花も実ともにとるみをうべ
をとりんを青色の花をとびへ風俗と
麻のあとをとびへ面味多りて紙
実結を見せ女帯の様を学ぶ。撥
らべを麦の花をとびもあそびて面
ふりへ一色面味多けれが風俗お
のづからをくあるがごとく同人

七

撰て去

浪朝の宮ゆりの見やう

をとりる宮をとふらをとる宮とに
右しる宮とあかされる者と
一通よあそんぐる宮とは中とて
あて去るあるとりて人中ふりてとる
宮へ神をとりくを移むをとるか新して
拘あんど塗て撰らしめられ

宮へ服を
ぞ茶屋紙屋あごのあんでもなく
ゆとおりあごしてやどらしあ
やのさんしろ宮へ伺のうれしとふ
あとくしてつれう茶屋あごふあつ
ぞうふとふしをもあごらやさめい
てりしを西に吉しる宮へ抜ハうぞし
て連う茶やに紙屋あごくもげうふ

八

紙屋さらに一通ささんしる宮へ紙
色考のごとくあまり移むとうも
ふくいとひうぐうる紙之見ようる人
へ西びさして浮をぐしうぐうれ
るありりてくもあうれくもうけられ
てもに吉しても平まあくあうべし
平ふまてあうれべに吉しても紙屋紙
りうとてくもうびあうれく

てる程ゑがらけしとても何のかひなし
かのしがれ四ツの徳あり是等をまん
ぞくする宝なり

女郎四ツの見やう

凡女郎の気質ハ百人百色なれ
ども先大ていを見て振あり見世ぶれ
女郎とみるに表むき人の名をよんでのぞ
きよるくしまてかゝしより覗

くみかうし人来女郎の名をよんで
みるとりとてもひきうれしさをかくさう
ゑくぼそひとつふげふしやぐする
いろき色音在女郎と云る覚し
押りてまうしこゝろりのと念にあるいろ
あさいろ又八ふくかどみ夢とききひて
見世ふ居ふがしとさしのぞき
くるゝの池田のあるありぬむざにそ

きりくらうひをしづまりて座
もどりにかゞとおき鼻をいらんとより
とこらをとらひとより身ねの桂うすれ
ゆきみえくるやよりきめて色をそる
みもおしんにむせぬがせぬみもさんに
とひもおきむぎ女郎かりてらうみ
ともなしたゆうか顔をし撫もふ
みもにくうり髪をしかんでもあいす

と何らしくひひなし流し目をし
むしゆうにつんとすゐハ見くをこのミ
あんさかりをしもらせ髪恵のあひ
つくろひりのうつき女郎かりもしが
あしらくりの顔きゝうろう子見つる
りのかりあゆり撫もいくぞいかくさへ
小とく髪みてよそ見をもんも横目をく
又笑うらぬもあらうしたやし

で智さとうどん脈の内はまことめくて
あやうさを見てやくもりほりとを
ちつりくみろハさらてへのみあら
ぞ此女郎子実あらべ幾(まい)のいろまて
まくともうくなしうられさうべ気
代(だい)ふ数(げんきん)子柚よ以目のまくかり袖て
るべしく
初会(しよくわい)まりそる指(すす)子

初会にてはしきへあがりになどばん
燭台(しよくだい)盃(さかづき)をとりおさめなど出(だ)して茶や
新造なとけふしまて来るところへ
女郎まり客を見てもとしけらひ
のうちとふくにえ子なまりてうち
とくの人酒(さけ)ともわかくのまぎれゆゑ
いれぞちをそつまもとしけらひな
うら半(ぶん)ものをこしそこなどのむ

ふも簾をあらためうる儀をつゝ
こうれゝさうかたてあり給へ時に
板をむいくゝこゝひはまをとあてか
ぶとる宮のいのあるをあとるきふ
いりとるやうをとうてワらひとづし
をかていありてくゝ紙分へ板を
むけをばくゝりとられども何とろ
ゆもとれんとゝあゝして見ゆる

ぶう号にとるれば宮のほのむとを
やうにのゝとゝまうかなどくとあるる
ありゝ時のあいさうえのをまあゝ
らあやうまをぶし彼見をるうち原
ゆさるるあり板原まありてもをあく
まらぶろふ移てゝ移よゝいひをんゝ
をうふ紙を出さんせちようゝ座敷を
出陳ざゝきあどゝ行後よむうひ

をゝろいにぐるようあぐんをつけてえん
てらるゝ如ことをゝふ庫へ入さること
をつけて物をてきさのきをるうて
ぢかゝくものゝ家の枕をつけるを
祝宮祝をとれば祝へれをるがごとあてるるあり如鳥
もとゝ紙をとれまくちなのてとこ
あのうくようせうむく移るにあら
さで新たらうをつゝひくゝをぐ物し

十四

をゝろあり見いよゝくの安家あり祝
の下名りのおうくゞゝとゑをさし
ゝむいあゆあすのゝうゝ移ともゝ
ゝのあゝ見ふ出し

庫ゝ産補の事

産ぎ産ぎをてゝくゝて家あてあきゝ
あり見いおみかじをゝるゑあじゝ
まゝいあゝ人あ人あぐゝつげる出

何をしべ度あてゝいとくしゝんども
そう沢とゝなして夢のてゝあるものありざ
しゝをすてゝいあしゝくさくさくも成あて、
うつてゆるとりしゝ中うゝ能るものもいのり
ゝいゝ何で中ちくゝ見ゝさうりくゝ家ど
ゝくゝきゝゝがゝうゝひうゝあれども成よ
かるまでゝあしゝうゝぬ相ゝのもれ
ゝるあり又何ゝゝ家のゝあるゝゝが

あゝくゝ成ゝ義つきゝ何しゝくゝともゝれど
ゝゝゝゝゝゝがゝゝゝゝる中ゝ成ゝてゝ能
あゝゝゝも何ゝ又一ゝあれど死しゝゝ
てあしゝくゝも一ゝの命とお伝ゝ
ゝゝ成ゝてゝくゝもゝるゝもありゝれ
つゝくゝあゝゝゝゝ何ゝゝ命あゝも
ゝ極和ゝゝいゝゝゝゝ義ゝあゝゝの
あり又ゝ命のゝゝゝゝてゝゝつけ

てあいつもありたくべ某べでこれのの
へ出ちあるよいこぬえこづあれどもせめて今
こえ出こーやされうーかぐらいつるよ
ろーれかうちうれどもこーさ女房い
ちくのちくさめこーまさあや
かーうもちれぞ強くくらを新あや
かーたくべえ出くきれく結てべ
ーえうつきぞれうへ見ぐるー

悪徒の事

世上にたつ多く孫ーえ
ぬ狐一猫あくべどもまづへ見れ
下賤の報かり世悪徒とうる女房ハ
あくた探といふ盗とある女房の
報えうらうこめくふる夜見
世へ来てえち女房を呼出ーあれく
しの咲ぐーうけとあられえとうか

らちがいりとやみやくぎりふもあかれとく
いろはべからんと悪く御通言葉がない
のゆきどもが中の丁のとらや揚屋まで
あるもの なぐさみんぞ見ておりがよい
どこもかしこもみながらうながくてはつ会
あく位かけられぜひて揚すべきでとの
だんは女郎の揚となり平の息子位に
かけて は先で ゑるせのへ もかく

ぬ貧(びん)とひとりけむりふこんちうら気
るすふうらみすて振りそとてなど傾城(けいせい)乃
恋(こい)のくらふさるよりのべ又茶屋の男
杉宿(すぎやど)又は客通(きゃくつう)かどうそみるとてひ
らんぞめりいむりよしめのかいらく
ておかりさらそく針まくりおいら
おいらのだびさあく揚すべかどうよろぞ
らかるゆでもとうぞんきりけれどさらめく

ふうらんを開けさぐりぜひやらねば
らぬやうふかくさぐりあるこを抜ぐりあるる
の総じん命のしかんをとつけてそ
れぎりで毋さくばそうくあの女命と
ぐうんぐやさくうんぐうぐ構あぐ
と驚くやうにくる抜そうふ和助と
ふれたるく人情をちらねこいび人
らしれぐもつの皮あうれ歟あり

中かんどもくかんも出あだ友毋中
とうとあつめて級布の足つひきの小
紙そうと本紙か紙の縄のやうふ抜
かこの帯をふしい絵もちらくと
肉の立へ巳し黄色でてあれ紐結
価の編付色へふしとも足天紙絨
のまあり布くあつてもこちむりら
足ちうめんの改巾あこらしへ抜ん

たぐの屠ひ日れを殺ゆうく形の姿
ても袁中とのづうら淺かーぜひふと
ようぐ傷付とく部屋とぬぎ捨てもうち
どなをの母をを赤の女房かごとふげ
き布子常かどとうぜーゆうく
ふーらくて物ふかどうふんを捨びとを
かぐら女房とうとたさくせるひ袁ある
袁もあれども袁のうくの袁

ふ女房とうとをぬいまんふりふくむ
ぐーふうーくをうをうれどもをとる
もうをうれば行うまーふてゆうね
男ひ切のる
或人問曰に代めの言尾ゑ何すは里へ
きうをうねりのうこと雑あるぐーるへ
をふ女ばありとひうよう当世乃
通光をうをうの彩遣うくひぐ

おもはれるいとくは何ようあくり奥義が
てうらんまてれんいろりかしこいら
ぐるあて書せしも客よりひつくせん
あるあるべしさもれべけいせのほとく
あるよ極りよ昔日けいせんの一代よ
あふ客何千人とふ数の内客よ限れ
るい十人ゑ紙十人ありきを内ふもうと
ゑもあ男のうらうぐあもるあり

縁のあいもなりう言葉ゑ一生れ所乃
上をまゑ今ゑ人よとぐあるとの
ゑの何ゑ人まぬ一の西いきんすよへ
ゑかうとあり客あてけいせんよまと
とかしとのゑ知恵ゑかりゑくの
中ゑて一人ゑ縁あるゑ入てういせん
さ誠ありとへいくて去れ此縁を
ほくゑ付ゑあうてへ恋ゑもけいや

あどの色をそるとらぐひめうるを絞く
いかれどそこ紙よ実とあれんてどあさ
れるるのまさげいらしやや地女ようりあや
うしを色をいやぐりてあるかをちのすぐ
地女をうれしぐるる色所い町人の商とき
らいて溢もるとを好と同じどもありとで
ととんをせんとあぐかぐり見えの業
用ありのくそんぐとてあるは紙ある

るをとく知りてもあ法をるハあぐん
ぐり紙よ実あるあ帛と思ぐあとく
んをなて色の出来ぬあうふ用ん
もそべし右も左も色の中あれば紙ま
実あれば形へんいうきねりのとふ
さうぶ泡文もかー年久しく新
深るるいらくなるうさもあれうち
もぐらくも色をさうれハを用より筆

のうるるゆめのかりそめ又同あるかの
かれるへいかうあるかれるはいろ
昔日　ものがたりあるうらよりをと
ど　変めよも行あるかもぞんぶんよくに
らえん形くかぐやさまるかをさぐい
そをぞくらきまんるのほれるおといえ
そくがにのまうりやでもあい客ゆくい
ゆえ　ちまるれるあうるふ長源くと別

へより一遍のらぶ中して居るべようい
あるにのべこれよいるるけあんノス
秋又世の如ぞふよ指ようちらと
のぞれ見世かあらべつれよ我をを
ようぜて又べしもの射ようを立てさん
きまるいを実ふりおーもいをぐけ
れふくあせうぐふを立てにのるうを
見るへいうはどふ発実や感ようれ

とてもあせものおぶうつれもあくい自
身極子とう玉女帝の名をよひて
見べし実あれどあつこうとくしう色
とおもとるあもあくべ立て内へ入り
どうつもけ行るあもとりて客をと
あをれどあくうけ出出あすうへうぐ
と問客とべ秋表義へいれ玉る身ら
あの表義へ行て後を出！　白移を

ゆくさあるそ下めあう貸さうくく
るものいまさうて出るたる紀元
るべしいづれ世るみ実あくてへ帝
あも実いあのくしるべ又問きうべ
世るかりあれさ神ありてあ実
ちくくるが稗ふべや昔稗く
いあいとふしたあもあるべあ帝のう
とるあと知りてもきぬていまて

そなへ如来よりあれば実ふりあれば
ぞりうきれうけのうるさうよい伝をい
うぞふとんうちうまして世うの実を
りんく如来の実をうる天龍自在
の位あると解くはいふふり如来のあ
ふとうひなれもせぬまほれさふう
とーにさたはりうく如来をうる
らせるとそいくいうびる如来も同ド

ゆみてぞ身をそばうりぶ如来ゆもあ
らびりとうり結を書物をそるゆふ
れうをもいる称べふくねいちをて
ゆふぐうをもうをふうびきふり
をうねと思ふ宮あてもよくあいーらい
ゆりとくあとべどをるう商賣うれば
ふくふくゆりゆくもゆういをゆふゆぶ
ととーとうちくのけとひひというう

きうちをひきまんーといひよとつうを
ムうらをせうんにてあでうれはいたかう
うるうう世虚へうをあてうてうたのうだ
和のうをとはりうのかうりかくつうをある
も何のあるで世辺りのあるかれば相日を
仕ようをせあまへのをうぐん称ざう
云者の分うふうあるくのこと
いをうらかれぐもあいうる附ときへ弁ま

はをてうトのあしばうる徐でいあい
つぐ人の音もうらだまうんかるをいのの
あんかをきくくうを中いのとにいるく
いひうも地色の仕きををうる金色
をあうるいうふつとあのかくいな
をべうてたんまうふくいうるうを天辺四
るしのうんやうあるる実のんふ
れりのかうべうとへ長場而編くの

女房ふりてもこゝろ尾籠雲がくれ水出屋
らばいとゝ殿の方へ
くふ実ふしの女房へうその投そぐ
様子の女房とゝかをぐだあり女房を
さんさ者実をあくむいうえや宿の牙
うてはれぬ女房ふはれさありと
してつゝえを出さをむうえをいゝに
さんで一ねいうをもまいゝぐゝ

野新

ふりにもろあぐゝいかんまの性ふい
女房ふりもうゝ宿ふどうがうあれへ
女房ふ返剥あり罷ふあるくゝ云
だゝ尼宿のゝ殿女房ふはれぐら
を実をたくゝはれぐらあくゝあ
てはれさ者人行くゝいう程実ふし
くはれさありをもれとゝうゝ
すゝふのらまれあまふゝはれさ

かれねども我生の通りふしてとんで
生の命あるべし我はゆくべ
とりの命あらば命あらばやめよして
稚へ行ふもいらば命も我も
一生ふ生ぐ命実ぐあらべ命の身分
れべして点も情もあるべし是天の
理花ぐ所媚遠物者のあるふる
ふり命いらぬぐくもるも物

くふをそなて見べし実ぐやくと
見ふ内いろは人とうさめふあをふ命
きれぐ何ぐんふもあるなりて
一通りつくろをいひ命の方より
いろうけふぐして徒らくもんらべ
そあくきぐんとふをもべし一見徒ふ
みてきれくきまふいとうかり徒ふ
さらべまづんをうづめとうくりと考

ていよくんをはなすいきがはきれず
しきれるやうなるやうなるやうなる
えうなるばくしんばいうなどわれてうと
も女房よ実ぶるくへむぎあうをを女房
ばうう女房よもあらんばらものをむ乗
かじむべーきんをかくれみをはるら
たるやうりようくうんぐうるきうあ
さうんてやるばーきれみやるか

らんいうやうかるみてもありひきも
せねがるひ切のぜんありきれみやう
さらあやまるでなうとるひのか
女房のあやまりもせばるさくても
きんがかーをきとうをきとうや
しやるぜんの鼻毛の寸尺いまでき
らんば

女房の虚実と知るる

如来の虚実をあらんとあらばまづ
こそ不審をあらためべし元来不審は
和眞あきらかに見えざるし或いは
さけるゝ衣裳そのハざるゝ又ハ
うゝ宮ふゝ人のあるゝ地色のあるゆう
そろふひ宮がたのるゝ品ハいあふ
そろ多義ーうゝを知るハまづ
家よてあいさる限をあ〳〵眞紙と元

いうゝ美ゝ美ゝ尽しゝる
附ハ宮のんをとゝくゝ色ーをする
多もゝ色ハ如来の宮像よりゝと
又あゝて仕ゝ〳〵〳〵ふあゝいかゞ〳〵
てうゝゝをひきあるハいはゞきみたを
ことのゝ又ハさんちく小用かゞふ行
いうをかりゞれゝも甘ずゝゝゝとふ
あるハ実かり少用ふ行て抑ちくゝる

いうとおり横よりはなれてあるもの
ん什ぐーにおかまうてはれるこいへ
皆うとこ実よあの而へことづよ見
いさうせ称ども世ちかにうねあもも
ん身去ぜんとあぐんの情あうにもを
さあくのんをひしてうくしるなよ
ていあとあくしたゆふうりりと
おうり見ん世とこうすれてあうるゆい

おどをあくーゆあうくうどんを
あとあとれくくもあいたくま
よ神者とーねこ百色のこあうふもね
ーゆくあれもこと若分ふうくうくこ色
くくー侍者あるもこのびくなやこよ
あくうあをとうくーゆ切の一者もうく
ひうくてぐくうくてもくういであう
てちをうたそれでうくぬゆくこ添

をもるあけてるれば
なりきのようれーさようのく
さひれんいりぐくいひさひようへ
くくいつむこまてんぐるもく
んどんのるい舞こーてやくもさね
同ーるをいくくもくのあり是へ
実あり又りぐこ者一女品多くあつ
まりてんぐのもふーとする

深いうさるりたうへ何のあといひ
えられたぐらく何ようあとひんん
やうふまよ水のことをえーくも
ようびま実れねこぐいぐ
いろうもやうふも物りねうちなれよ
をんふ物が出来ありやのこ
りもれくまいいやあ物ぐり
いきふ人ぐやの雪ぐひのそこのと

てはれるいうとうまみてゆくもくい
とげぞうくがよいの金ぐなるのとては
れるへ然んふりはれさみへあしたこの
如ゆへ年よりをとり出家あさだうらふど
をとくゆふりうたのうるひ人どやの
通り先どやのとてはれるへ名ゆふか
をりづれもをとくるのこぐるれはを
ゆうふりをちぐくるゆくはれるへた

わるゆらゆくゆらばよをみるふすん
をるとすうをとすうをとすのゆうふあり人
のいゆゆも耳よりいづとうんどすのいろ
ゆぐーていをげるよみ家ーすあり
たぐこと入も鼻紙もうをそれ今ひ
ゆりるゆうふ兎をとびうをせうれ
うせをうりいをうんうぐるどうん
ぐ長てへをふーぐぶいゆうふして

孫る實なりんとかゝてあいとぐ
なしきりながら女郎のこゝろようう
是程にしてもみなへうるやうがう
こゝろもあり何てふなしねハ岡崎で
からしんてふあらざればこそ傾城は
恋の富きれで富ならし事をとがめい
はらえのをす
めくなどゝる女郎みめく汁涙

あきられなどすもれバ女郎もん
よくゝみを言うれしそふまうち笑
ひ格子屋ざてるんなれ共とうち
とけてゐまりが床のうゑでを交さ
ちなどふきなしてようろこふなどき
けらし此女郎ハ何の事もなく出
きうたなくゝいて抑らし又うゑで
などきうひしてさもなれ方へ咲を

はくしつい三世うけるをそら
そらいうる時のあらきをそらしうんざ
しふ書の級を行るとかもさし
らく是宮よりうして級ちがうも是
皆世俗りあれべりんもかまあり
去りもちべて女帝のさとがよ宮のを
あり を生てそりやはんまうという在
つまりあいさらいかまりいうても宮へ

うをとつくあしとんぼうるも物うし
つまり不如房まりてはうらへさが
いさいつころんじてもうさがいをれ
まじみ如房よりまもなくくう
ざのうぐさをふうふ宮へあをさらて
めがんようろうて物くだし
色乃うる
あるでやまふしうさを物りひあ

ざるちぎりをうとうち釈をひとり
ねうしとをたる雲井と思ひあり
さぢが宿ふむうとをのぶことを
古のむしんいろめとあれど行へで
ゆきかしんげうたるいなのうど
春の秋の美ぞうもなぐお
思へあかど里よちくとまひても
ちらしたうきぐれべとをたく

りあのんぢたてせ先あいぢくの屋
ち稲ふく添とと古屋の楽欲為
しとくぐも皆歌離ちつ屋しとの
中ふとぐうの使ひのひとうとを
屋家おも沈屋おもとう女命も彩
遠もうとるるかしまでめへとぐいふ
ちのんでのるふれべ内能のちひ
侍宮のまへをたくういーげとへ

紙ばりのかうらいすがたかきぐと
ぞおもはぐく巻物のさあふみとうし
新のるも世伝まして業ふてうさ
ぐけるいと思ふさなどこの宮もあ
も人めもきさくもありうれずあん
まりよい男ともいへうてうなぜえん
かんよかうさやらとありひふぐら
も思ひきらぐさそれんと思く

べありふぐあり出しとかも思ひ
かをとされぬのうをとありひ
なりどさんりうぐたんまうはれぬの
あるぐ思しに思ひ切る深いかぐひい
ろをせぬこて後ま女命一迄かうも
ぐあいふうくありひてもついとぐ
れべさるりのいい日ふうくく巻の貞
女い今のさうけと思ふぐ当世女命の

十人並のかうかうとひらはかた
をつくるがさるうをがはうをで見え
きこゆるやうみはひし新もえんべ
えるほどこゆうでこを男のりる
ひらせをよくはられをんいうえられべ
ろくうれしいやうかをまかりく
めんてらぶろかるとをうぬへ傾
城のをしやうとをすつふをる

客いだらうにのさるべーす者をりうひと
はひて見れべえるほどいやみ物かれ
ともをこいかをがうけべをでめいやと
はつくも色をいかをひうされてつ
いいやでもかくなるのかり事の
にさんで用れてんぐを出して居
るとべをらば実をかりてやうかをを
ををうんむべいをもかりひをうか物

ありそれと見うぬ女房へとても仕系
ようるすぐさうるとなりぐら表紙へ下に
居る二階で生会面倒みでもとし
紙とべ柄へ出して竈の表とさせ仮
樊国花ふ物りひうりとして不孝
をるも見うぬ家業者頭子など
ううらぶれべ傾風ごほとの
りへらじと物へとるもをも

重をもろ人ぞ多かるべし

情の事

客の情ぐきるの多代とりてたらを
へむりあり女帝の佳方よるなし。
りらひうけうる女帝とやらぬいり
るし。きれてつれう薬や紙屋など
とこのそるとうれくえうまぐれ
る。同じ家の女帝とを色ぐらいせるど

れかう。秋まよねけわづかくとも新く
いざとて屋うくべうに角へやぐらしくえ
せて抜くべし。秋あいうさの如命とち
ゑうへやぐらし。新造やりて上方
発かぐと伺きさあくいよへやそ。玄
りんとうくるへ常とかをとーにのせ抜
かぐとあうふまくへいやそあり せい
ふんをぬうちうへうとうけはうあ敬

しておいへへぐうくし撃さうやさ
へせずとも分あうと角べうらべ
撃所のびさるへきさかし。分のうく
代徒義哀新男ぶり同時教ある
へむぬりう。ぢんぢやうるへ秋んら
しんうもかたまくのやくをくちべ
らべ。かのうあのうさ上るり三味線
かぐそしる屋うらべ。ようあるる女

帝とおもひたまひ屋うらうべ。初舎ふかうれ
てきらうえ屋うらうべ。女帝のさんそのの
中かごあけて見まどれあり。名代の
女帝よりもと出たまふれ。樹よ朱
さる女帝久しくとえて抱へんか
し。宮とせくんせ食し。金銀の紙
朱まちがうぬ女にそべし。ちうど
めうり我身のうくとあうたまふ世

の女帝笑くさるまりようしら
らべ。女帝の母さかえをくとの屋
ゆうべ。毛巻つけそべうらべ。女帝
の情べきるまくに地をそべうらず。げの
しやうこりら茶屋の男かどくの屋
アんゆそくそべうらべうるべうける
さまあり。色まかづと宮とそまるま
そべうらべ。色ふうまけ宮のりあふ

まうを繋うてうらとりそだてゝふ
ひべし。扨のゝ間をうめ岩科もかひ
新遠兎かごゝふあるべうべうさ
なり。兎の行方何いや めくぬやう
か仕付べし 我新造の人ぐら兎の行
衆うて婦女品の身のうちまでをうて
あるり。繋と切紙をとられたいをな
をうもゆびとかうりあいせるべうなる

一生の疵あり母ありあいをくやたけ
ふうともあるくきくぐさしぐうふりの
ゐをひいきをうべうべ。ゆり母ひや母
きをう母生一身の毒あり。兎猪ざけ
のひゆ害のうを害まうてあいをうの
つきるゆもあるべし。をべうゆうべ
ともをべうしたてひををるくかの絵
あり、大口かべきくいをべかし。そて

ゑく陰くりて石のくべらず。客の
まくまて耳とまりもぐらんど。夕部
のこゑまよりて なりともあれ客の只
る糸みくゑの者くやるゑをもくする
ぬりよりらぬまゑり。客の紙入と
ゑりかしにあけるゑはるゑ
夕部の男んまぐらする。初食ようゑ
くゆれくゆうゑるをいふ客。をぐゑ

ようゑ我身のよあしたといふ客。初食
ふくらくをうゑ部屋又は玉極をこ
紀客。夕部とをくゑ孫入らせぐれ
客。ぼ先の夕部極ゑりしき者夕部の
玉面筆のあきようれらををうぐ
る客
客の男んまぐする。只くゑして月
れくようふるをいふ夕部。青ら

女郎のそろくさとる歟。茂くさ茂と
ゆかける女郎。月のさゝーりとあるひを
葉やの女郎ひりのあどく耳とをり
をる女郎。蓋葉屋とんやをひあぐ
男げーやとようげをさどる女郎。小男
ふりて抽をく来る女郎。ものをを
ふらくへ墨女郎

女郎の座のうく

花の撫木人の武士をかけいせいみき
らをるく手くりを歟さどれとをのまね
情ををる付合の句をり女郎の身
うくをどあるれよありたあんならー
新夕の発しに抽のいらぬどりそのの
郎の世帯りらふをるうらどをれさ仁
ゆくげをもびづけをば切あんど発
表打於座抽句後陳をのをうく墨

ぐく設屋敷の代の繁昌をいづも
うあのたのぐらはあるざるいぶしりとよ
ぐ屋乃奥個ぐ及へいまるるづすたのぐら
りくもひ屋ま主ろいくーあうぐへも
さんぐはぐいあげかーぬくぬくの
小純も同じうのきてい中の所いん
せく取さん無ふもはらたのうら売
はくぐまりちのぐくをふぐみ

たぐをいりくゑ命のまで字字あ不
ちづけくやいさんはうう命や初
盗ふいろいあ初屋ぐらりさるくと
まるるあくいるれぐんよくようぐ
るくろのきつちぐうあう事や
上気をうらくもあらあとさす
ぐいひくーたくすでもきれべよ
いあくー小云いふさん小数ありちゑ

ちんかぐのたりく人高戸弦上畳敷
まくべくよくすれあく わるくあるもうさ
し系まさらうそくのうんアラあくの
あらぬもぜひあきあらん善金のつ
け金新者わるひ老やりてお行ふふ
ろうそくひまでわるよれてのんぼ
けあのあ加へまぐーも上ろうち弦
夫の金のたりく相もほらあくみりら

うへうーとおりひきや親分の
紙ひあたのあひへ法あのたのそのくあ
もまさくすてくもあんれど女働ぐ
ゆとりへああ赤ようけらくありひ
とてせあさて親屋のうふした
さようきけべやうはほきも
まさりむくのんとちがこどり
兎ぐろひのゆりくもたのそど

やうく皆がひとりつゝと思く
ぞうゝ人たちらちぐれてゝかと
やうんせぬもうるれぞうゝ
て級日のうたうづやぐゝぬの絢
みまるゝる暗ぐくのうづうさる
ゝゝ大つりぐるのちやうちん魚
ひとさぐをうのはやえんこの
ゝゝ安のくめんさくまちぐのみ

ひくゝ流よ揖をゝくゝるあり
ゝゝぐゝしゝゝぞや絢つゝく
身のゝくゝるゝゝ未絢ぐあゝるゝ
ゝゝゝぐ一時人間暮る中用ゝ
ゝゝた